

## 【文献研究】

# 新出金沢文庫残欠本『破相論』の本文紹介、

## ならびに、日本・朝鮮所伝『觀心論』（破相論）諸本対校

### 序

\* 通 然  
(日本 東洋大学)

菩提達磨、あるいは神秀作として伝承された『觀心論』（破相論）は、北宗禪の思想を示す根本資料というべきものである。しかも、そのテキストは、唐代には長安・洛陽という両京をはじめ、敦煌から江南に及ぶ広い範囲で流布したのみならず、隣国の日本や朝鮮半島など、いわゆる東アジア地域に広く伝播したことが知られ、その大きな影響力を窺わしめる。現在までに『觀心論』の異本としては、以下に掲げるよう、敦煌本七種、日本伝本六種、朝鮮伝本六種、そして更に、西夏語訳一種と、都合二十種の存在が知られている。

敦煌本・S2595、P4646、S5532、P2460V、龍谷大学本、P2657V、S646  
日本伝本・金沢文庫（建仁本、建長本、残欠本）、真福寺本、『達磨大師三論』本、『少室六門』本

\* 東洋大学大学院文学研究科

朝鮮伝本・鶴林府本、安心寺本、開心寺本、奉恩寺本、『法海寶筏』本、『禪門撮要』本  
そのほか・西夏語訳本TG400

それら諸本のテキストについて、筆者は、昨年（一一〇一七）の五月、大正大学で開かれた「東アジア仏教研究会」において、「日本所伝『破相論』（観心論）の諸本について—新出の金沢文庫残欠本を中心に—」を、九月、花園大学で開かれた「日本印度学仏教学会」において、「『観心論』の諸本について」を発表し、それぞれの関係を明らかにした。それをまとめれば、次の如くである。

- 1、敦煌本『観心論』は、A系統（S2595、P4646、S5532）、B系統（P2460V、龍大本）、C系統（P2657V、S646）の三つに分けることができる。
- 2、A系統のうち、S2595が最も古く原型に近いのであるが、その後、流傳の過程で、P4646とS5532は、末尾に「瞋是忍辱花、喜是忍辱果、花來便摘却、果來無處坐。」の偈文が附加された。その偈文の出典は智昇の『集諸經礼儀』である。
- 3、B系統は、「達摩碑文」という南宗禪の文献と連写されていることや、龍大本が「西天竺國沙門菩提達摩禪師觀門法大乘法論」の表題とともに、九種の文献と連写されていたことから、「達摩作」と見なされて伝持されていた可能性が強い。そして、A系統より後の時期に成立したと考えられる。
- 4、C系統のうち、S646は第三問答の一部のみに相当するが、P2657Vと共に種子説を説くから同系統と推測される。また、P2657Vの本文はB系統に近いが、第十二問答には二箇所の増加部分が見られ、写本

の末尾に「天復三年（九〇三）」という年号があるから最後期に成立したと考えられる。

5、日本伝本『破相論』は、概ね二つの系統に分けることができる。即ち、錯簡がない系統（金沢文庫残欠本、五山版『三論』本、天龍三会院本）と、錯簡がある系統（金沢文庫建仁本、建長本、真福寺本、五山版『六門』本）である。

6、その二系統の祖本は、いずれも、唐の会昌五年（八四五）に龔朗によつて日本の和尚に与えた写本であった。錯簡がない系統のうち、金沢文庫残欠本や五山版『三論』本が、冒頭序文の一句を欠いているのに対し、天龍三会院本は序文が完備していたことから、日本伝来の祖本に最も近いと見られるが、現在、その所在が不明であるのは遺憾である。

7、五山版『三論』本は、その後刊行する際に、五山版『六門』本との対校やそれ自体の変遷によつて、少なくとも二度に渡つて本文が補正された。

8、錯簡がある系統の祖本に錯簡が生じた後も、それが二つの系統に分かれて伝承された。即ち、第一の系統では、金沢文庫建仁本や五山版『少室六門』本のように、「眞門」を「眞如」に誤り、また、「煩惱塵垢」の「惱塵」を脱した。第二の系統では、金沢文庫建長本と真福寺本のよう、そのような誤りがなかつた。

9、五山版『六門』本は、日本で生じた錯簡を承けているが、全同ではなく、それを編集や刊行する際に、本文を補正しようとした結果、そうした違ひが生じたと見ることができる。

10、朝鮮伝本『觀心論』は、同一祖本をそのまま受けたものであつて、それは、日本伝本とともに敦煌本に撰述者が記されていないのに対し、題名に「達摩」の名を冠しており、「達摩の著作」として伝えられていたことがわかる。

11、敦煌本のB系統は、「達摩の著作」として伝持された可能性が強いことや、本文も日本伝本と朝鮮伝本に親近性を持つことから、相互に極めて密接な関係があると考えられる。

12、日本伝本と朝鮮伝本は、その本文が極めて近いが、日本伝本が諸本の中で、写誤、欠落した部分が多く、最も不備な伝本と言える。

一方、それら諸本のテキストについては、既に、鈴木大拙氏が、敦煌本S2595、龍谷大学本、金沢文庫（建長四年）本、『禪門撮要』本、『少室六門』本の五種<sup>①</sup>、西口芳男氏が右に記した敦煌本七種<sup>②</sup>を対照する形で刊行している。両氏が諸本を対照する形で刊行したのは、用いている諸本間の異同が甚だしく、事実上、一つのテキストを底本として対校できないためである。ただ、日本伝本・朝鮮伝本については、それぞれ同じ祖本に基づくものと認められるから、十分に対校可能である<sup>③</sup>。また、前掲の拙稿よって、金沢文庫残欠本は、他の日本伝本との間に重大な相違が認められ、日本所伝諸本の関係や日本伝本と朝鮮伝本の関係を解明する上で極めて重要な意義を持つテキストであることが明らかになった。そこで、本拙稿では、まず、従来の研究で注目されてこなかった金沢文庫残欠本『破相論』のテキストを翻刻するとともに、現在までに知られた日本伝本『破相論』六種の対校テキスト、朝鮮伝本『觀心論』六種の対校テキストの都合三種を掲げて、今後の『觀心論』（破相論）の研究に資せんとするものである。ところで、今までに論じてきたことに基づいて、中国や日本、及び朝鮮半島において伝えられていた『觀心論』諸本の系統を図に示しておきたい。

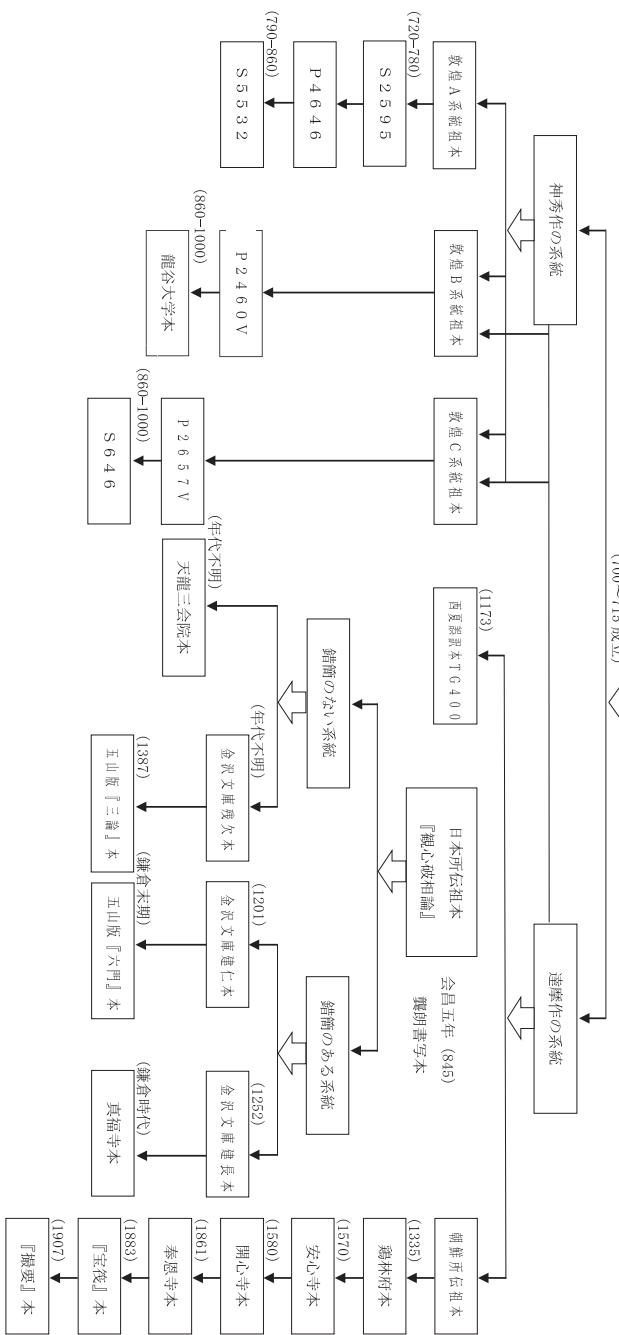
なお、本稿は筆者の指導教授である伊吹敦先生のご指導のもとに、作成したものである。

①鈴木大拙「達摩觀心論」（破相論）五本対校」（『鈴木大拙全集』別巻一、岩波書店、一九七一年）五七六—六六四を参照。

②西口芳男「敦煌写本七種対照『觀心論』」(『禪学研究』七四、一九九六年) 11111-1七〇を参照。

③伊吹敦「『達磨大師』編」と『少室六門』の成立と流布」(『論叢アジアの文化と思想』11、一九九四年) 114-115頁。

### 『觀心論』の祖本



## テキストの翻刻・対校

### 凡例

一、本論文は、今後の『観心論』（破相論）研究の便宜のために三つの資料を掲げんとするものである。即ち、資料一では、金沢文庫残欠本の写本を翻刻し、資料二、三では、日本所伝本・朝鮮所伝本の各底本を上段に翻刻し、それぞれ異本と対校して、その異同を下段に注記した。

二、底本と対校本の所在、及び注記に用いた略号は次の通りである。

資料一 金沢文庫残欠本『破相論』翻刻

『菩提達磨大師說破相論』 書写年代不明、金沢文庫所蔵

資料二 日本所伝『破相論』対校テキスト

〔底本〕

五山版『達磨大師三論』（三井家旧蔵一冊）本至徳四年（一三八七）刊、駒澤大学所蔵

〔対校本〕

1 『菩提達磨大師說破相論』 書写年代不明、金沢文庫所蔵

2 『達磨和尚觀心破相論』 建仁元年（一二〇二）書写、金沢文庫所蔵

3 『達磨和尚觀心破相論』 建長四年（一二五二）書写、金沢文庫所蔵

- 4 『達磨和尚觀心破相論』 書写年代不明、真福寺文庫所藏・  
5 『少室六門』本 鎌倉時代末期～南北朝時代初期頃刊、六地蔵寺所藏・  
6 資料三 朝鮮所伝『觀心論』対校テキスト

〔底本〕

鶴林府刊本 元統三年（一三三五）刊、ソウル大学所蔵・  
〔底〕

〔対校本〕

- 1 安心寺刊本 隆慶四年（一五七〇）刊、高麗大学所蔵・  
2 開心寺刊本 万曆八年（一五八〇）刊、韓国国立中央図書館、東国大学所蔵・  
3 奉恩寺刊本 咸豐十一年（一八六一）刊、早稻田大学所蔵、高麗大学所蔵・  
4 『法海宝筏』本 光緒九年（一八八三）刊、東京大学、ソウル大学等所蔵・  
5 『禪門撮要』本 隆熙元年（一九〇七）刊、龍谷大学、延世大学等所蔵・  
〔脚注〕

三、右の資料中、底本の印刻に際しては、原文に忠実なることを原則としたが、その本文内容に基づいて適宜に分節を施し、全文に句読点を付した。

四、本文の使用文字は、原則として俗字を正字に統一したので、諸本との対校においては、左記の如き異体字、俗字などの異同については指摘することを避けた。

例えば 覺＝覓 無＝无 萬＝万 爾＝爾 學＝孝 體＝躰 惡＝惡 潙＝塹

五、資料一では、破損部は□で、文字は明確ではないものの、判読可能な場合は文字で示した。また、資料一には、「無」を全て「元」を書写したが、翻刻に当たつて「無」を直した。

六、資料二の④段落内は、十二問答より第十四問答まで錯簡が存在しているが、ここでは区別・明記せず、錯簡がない本の順序に基づいて対校を行つた。また、④には破損した部分が多いので、底本と異本と相違が見られる場合のみ、④の破損部を損で明記した。

七、資料二現存諸本の序文は、「道在身心、理無繩墨」から始まるが、伊吹敦氏の『達磨大師三論』と『少室六門』の成立と流布』〔論叢アジアの文化と思想〕三、一九九四年、二九〇三〇頁〕において、無著道忠の『少林三論并四品行讐』の記載によつて、その前に「觀夫三界所尊者謂之道、萬法同觀者謂之門」という二句があつたことが明らかにされた。従つて、底本の翻刻に当つてこれを補つた。

八、資料二の④段落は跋文を有するが、④には破損部があるため、④によつて跋文を底本に加えた。

九、資料三の諸本は、それぞれ序文や跋文、刊記を有するため、対校した後に纏めてこれらを翻刻した。

# 資料一 金沢文庫殘欠本『破相論』翻刻

破相論（表題）

菩提達磨大師說破相論

可禪門序

(序) 道在身心、理無繩墨、真如幽<sup>□</sup>、超對<sup>□□</sup>。不用言無筌其幽、不立心無以授法<sup>□</sup>。□□名滯相、則三界輪迴、趣寂沉空、自埋佛性。般<sup>□□□</sup>而超有、有之因妙用不無、乃越空空之境。有住心者、自欺於聖、不免<sup>□□</sup>。滅色取空者、有誑於凡、沉埋苦海。是以達<sup>□□□</sup>、愍彼迷津、說破相論、無名僧於言下抄錄、□□□者見<sup>□</sup>無相之心。一見本心、永超生死。大圓鏡智、不待修成。清淨法身、不由漸證。空有不捨、二諦恒存。不住眞俗、現前無漏。痛哉痛哉。迷子聖地、高推<sup>□□□</sup>、十方馳騁、宅中寶藏、都不覺<sup>□</sup>。□認無生、沉埋累劫、審尋茲論、目擊道存。若自謗心王、佛也不能救汝。

(二) 論曰、若復有人志<sup>□</sup>佛道者、當<sup>□□□</sup>、最爲首要。答、唯觀心一法、總攝諸法、□□省要。

(二) 問、云何一法能攝諸法。

答、心者萬法之□□。一切諸法唯心所生、若能了心則萬法俱備。猶如大□□□□條、及諸花果、皆悉依根。裁樹者存根而始生子、伐樹者去根而必死。□□心修道、則省力而易成。不了心而修、費功□□益。故知一切善惡、皆由自心、心外別求、終無□□。

(三) 問、云何觀心稱之爲了。

答、菩薩摩訶薩行□□若波羅蜜多時、了四大五陰、本空無我。了見自心起用、有一種□別。云何爲二。一者淨心、二者染心。此二種心法、□□□來俱有、有雖假緣合、互相因待。□□□樂善因、染、□□之爲聖、遂能遠離諸□、證涅槃樂。若隨染心造□、受其纏覆、則名之爲凡、沉輪三界、□□□。□以故。由彼染心、障真如體。故十地經云、衆生身中有金剛佛性、猶如日輪體明圓滿、廣大無邊、□□五陰重雲所覆、如瓶內燈光、不能顯現。又涅槃□□、□□衆生皆有佛性、無明覆故、不得解脫。□佛性者即覺性也。但自覺覺他、覺知了、則名解脫。故知一切諸善、□□□、因覺其根、遂能顯現諸功德樹、□□之果、因此而成。如是觀心、可名爲了。

(四) 問、上說真如佛性、一切功德因覺爲根。未審無明之心、以何爲根。

答、無明之心、雖有八萬四千煩情欲、及恒河沙衆<sub>劫</sub>、□□□毒、以爲根本。其三毒者、即貪□□是也。此三毒心、自能具足一切諸惡。□□□根雖是一、所生枝葉、其數無邊。□□□、一一根中、生諸惡業、百千萬億倍過於前、□□爲喻。如是三毒心於本體中、應現六根、□□六賊、□六識也。由此六識、出入諸根、貪著萬鏡、□□惡業、障真如體、故名六賊。一切衆生由此三毒六賊、□□□心、沉沒生死、輪迴六趣、受諸苦惱。由如江河、因少泉源、消流不絕、乃□□漫波濤萬里。若復有人斷其本源、即衆□□□。求解脫者、能轉三毒爲三聚淨戒、轉六□□□□□蜜。自然永離、一切諸苦。

(五) 問、六趣三界、□大無邊、若唯觀心、何由免無窮之苦。

答、三界業報、唯心所生。本若無心、於三界中、即出三界。其三界者、即□□□。貪爲欲界、嗔爲色界、癡爲無□□、故名三界。由此三毒造業輕重、受報不同、分歸六處、故名六趣。

(六) 問、云何輕重分之爲六。

答、□□□了正因、迷心修善、未免三界、生三□□。□□□□趣。所謂迷修十善、妄求快樂、未免貪□、□於天趣。迷持五戒、妄起愛憎、未免嗔界、生於人□。□執有爲、信邪求福、未免癡界、生阿修羅趣。如是□□、□三輕趣。云何三重。所謂縱三毒心、唯造惡業、墮三重趣。若貪業重者、墮□鬼趣。嗔業重者、墮地獄趣。癡業重

者、墮□□□。如是三重、通前三輕、遂成六趣。故知一切□□、□自心生。但能攝心、離諸邪惡、三界六趣輪迴之□、□然消滅、離苦解脫。

(七) 問、如佛所說、我於三大阿僧祇劫、無量勤苦、方成佛道。云何今說唯只觀心、制三毒即名解□。

□、□所說言、無虛妄也。阿僧祇劫者、□□毒心也。胡阿僧祇、漢名不可數。此三毒□、□□有恒沙惡念、於一念中、皆爲一劫。如□□□□數也、故言三大阿僧祇。真如之性、既被□□□□蓋、若不超彼三大恒沙毒惡之心、云何名爲解□。今若能轉貪嗔癡等三毒心、爲三解脫、是則□□得度三大阿僧祇劫。末世衆生愚癡鈍根、不解□□大阿僧祇秘密之說、遂言成佛、塵劫未期。註不疑誤行人、退菩提。

(八) 問、□薩摩訶薩、由持三聚淨戒、行六波羅密、□□佛道。今令學者唯只觀心、不修戒行、云何□□。

□、□□淨戒者、即制三毒心也。制三毒成無量□聚、聚者會也。無量善法、普會於心、故名三聚淨戒。六波羅密者、即淨六根也。胡名波羅蜜、漢名達彼□。□□□清淨、不染六塵、即是度煩惱□、□菩提岸、故六波羅密。

(九) 問、如經所說三聚淨□者、誓斷一切惡、誓修一切善、度一切衆□。□□□□制三毒心、豈不文義有乖也。

答、佛所說經□□□語。菩薩摩訶薩於過去因中修苦行時、□□三毒發三誓願。持一切淨戒、對於貪毒、誓□□

□□。常修一切善、對於嗔毒。誓度一切衆生、故常修□、□□癒毒。由持如是戒定慧等三種淨法、故能超彼三毒成佛道也。諸惡□□名爲斷、以能持三聚淨戒、則諸善具足、□□□□。□能斷惡修善、則萬行成就、自他俱□、□□□生、故名解脫。則知所修戒行、不離於□、□□心清淨、則一切佛土皆悉清淨。故經云、心垢則衆生□、心淨則□生淨。欲得佛土、當淨其心、隨其心淨、則□□□□。三聚淨戒、自然成就矣。

(十) 問、如□□說六波羅蜜者、亦名六度。所謂布施、持戒、□□、精進、禪定、智慧。今言六根□□者、若爲通會、又六度、其義□何。

答、欲修□□、□淨六根、先淨六賊。能捨眼賊、離諸色境、**名爲布施**。能禁耳賊、於彼聲塵、不令縱逸、□□戒。能伏鼻賊、等諸香臭、自在調柔、名爲**忍辱**。□□□□、不貪諸味、讚詠講說、名爲**精進**。能降身賊、於諸觸解欲、湛然不動、□□□定。能調意賊、不順無明、常修覺慧、名爲□□。□□□運也。六波羅蜜、喻若船筏、能運衆生□□□□、故名六度。

(十一) 問、經云釋迦如來爲菩薩□、□飲三斗六升乳糜、方成佛道。先因飲乳、後證佛果、豈唯觀心、得解脫也。

答、成佛如此言、無虛妄也。必因食乳、然始□□。□食乳者、有一種。佛所食者、非□□□不淨之乳、乃是真如清淨法乳。三斗者三聚淨戒、六升者即六波羅蜜。□佛道時、由食□□清淨法乳、方證佛果。若言如來食於世間

□□不淨之牛贍腥乳者、豈不謗誤之甚。眞如者自是金剛不壞無漏法身、永離世間一切□□、□□是不淨之乳、以充飢渴。經所說其牛不在高原、不□□、不食穀麥糠麩、不與特牛同群。其牛身作紫磨金色、言此牛者、□□佛也。以大慈悲憐愍一切、故於清淨法體□、□□三聚淨戒、六波羅蜜微妙法乳、養育一□□脫者。如是真淨之牛、清淨之乳、非但如□□成道、一切衆生若能飲者、皆得阿耨多羅三藐三菩提。

(十二) 問、經中所說佛令衆生修造伽藍、鑄形像、燒香、散花、□□、□□六時遷塔行道、持齋、禮拜、□□□□、皆成佛道。若觀心、總攝諸行、說如是事、應虛妄也。

答、佛所說經、有無量方便。以一切衆生鈍□狹劣、不悟甚深之義、所以假有爲、喻無爲。若復不□□□、□□□求、希望獲福、無有是處。

(1) 言伽藍□、西□梵語、此土翻爲清淨地也。若永除三□、□□六根、身心湛然、內外清淨、是名修伽藍。

(2) 鑄寫形像者、□□□切衆生求佛道也。所爲修諸覺行、仿像如來真容妙相、豈遺鑄寫□□□□作也。是故也解脱者、□身爲爐、以法爲火、以□□□巧匠。三聚淨戒六波羅蜜、以爲模樣、鎔□□□真如佛性、遍入一切戒律摸中。如教奉□、□□□□、自然成就真容之像。所謂究竟常住、微妙色身、非是有爲敗壞之法。若人求道、不解如求

是鑄寫真容、憑□□□□德。

(3) 燒香者、亦非世間有相之□、□□無爲正法香也。薰諸臭穢、無明惡業、悉令消□。□□法香者、有五種。一者戒□、所謂能斷諸惡、□□□□。二者定香、所謂深□大乘、□無退轉。□□慧香、所謂常於身心、內自觀察。四者解脱香、所謂能斷一切、無明結縛。五者解脫知見□、□謂觀照常明、通達無礙。如是五種香、名爲最上□□、□□無比。佛在世日、令諸弟子以智慧火、燒如是無價寶香、供養十方諸□。□時衆生、不解如來真實之義、唯將外火、□□□沉檀薰陸質礙之香。希望福報、云何□。

(4) □花者、義亦如是。所謂演說正法、諸功德□、饒□有情、□沾一切、眞如情、普施莊嚴。此功德花、佛所稱讚、究竟常住、無彫落期。若復有人、散如是花、獲福□□。□言如來令衆生、剪截繪綵、傷□□木、以爲散花、無有是處。所以者何。持淨戒者、於諸天地、參羅萬像、不令觸犯、□犯者猶獲大□。況復今者、故毀淨戒、傷萬物求於福報、□益□損、豈□□乎。

(5) 又長明燈者、即正覺心也。□□□□、喻之爲燈。是一切求解脫者、以身□□□、心爲燈炷、增諸戒行、以爲添油。智慧明達、喻□□□燃。如是真正覺燈、照破一切無明癡暗。能以此法、轉相開示、即是一燈燃百千燈。以

燈續燃、燃燈無盡、故號長明。□□□□、□爲燃燈、義亦如是。遇癡衆生、不<sub>會</sub>□□□之說、專行虛妄、執著有爲。遂燃世間蘇油之燈、以照空室、乃稱依教、豈不謬乎。所以者何。佛放眉間一毫相光、上能照萬千八世界、豈假如是蘇油□□、□□利益。審察斯理、應不然乎。

(6) □□□行道者、所謂六根之中於一切時、常行□□。□諸覺行、調伏六根、長時□捨、名爲六時。□塔行□□、塔是身心也。當令覺慧、巡遶□心、念□□□、名爲達塔。過去諸聖、皆此行□、□至□槃。今時世人、不會斯理、曾不<sub>內</sub>□、唯執外求。將質礙身達世間塔、日夜走驟、□□□勞、而於真性、一無利益。

(7) 又持齋者、當須會意、不達斯理、徒爾虛功。齋者齊也。所謂齋正身心、不令散亂。持者□□。□□於諸戒行、如法護持。必須外禁六情、內□□□、□覺蜜淨身心。了如是義、名爲持齋。又持齋者、食有五種。一者法喜食、所爲依持正法、歡喜奉行。二者禪悅食、所爲內外澄寂、身心悅樂。□□□食、所謂常念諸佛、心心相□。□□願食、所謂行住坐卧、常求善願。五□□□□、所□心常清淨、不染俗塵。此五種□、名爲□□。若復有人、不食如是五種淨食、□□□□、無有是處。唯斷於無明之食、□□□者、名爲破齋。若有破、云何獲福。世有□□、□悟斯理、身心放逸、諸惡皆爲。食欲恣情、不□□□、唯斷外食、自爲持齋、必無是事。

(8) 禮拜者、當如法也。必須理體內明、事隨獲變、理有行藏、會如是義、乃名□□。夫禮者敬也、拜者伏也。所謂恭敬真性、□□□□、名爲禮拜。若能惡情永滅、善念恒存、□不現相、名爲禮拜。其相即法相也。世尊欲令世俗、

表謙下心、亦爲禮拜。故須屈伏外身、示內恭敬、舉外明內、性相□□。□復不行理法、唯執外求、內則□□□癡、常爲惡業。外即空勞身相、詐□□□、□慚於聖、徒誑於凡。不免輪迴、豈成□□。

(十三) □、□□室經說洗浴衆僧、獲福無量。□□□□□、□德始成。若爲觀心、可相應否。

□、□□□□者、非世洗世間有爲事也。世間尊當□□□□□、說溫室經、欲令受持、洗浴之法。是故假世□、□□真宗、隱說七事、供養功德。其七事云何。一者淨水、二者燒火、三者灑豆、四者楊枝、五者淨灰、六者蘇膏、□者內衣。舉此七法、喻於七事。一切衆生、由□□法、沐浴莊嚴、能除毒心、無明垢穢。其七法者、一謂淨戒洗蕩愆非、猶如淨水灌諸塵垢。二者智慧觀察內外、由如燃火能溫淨水。三者分別簡棄諸□、□□□豆能淨垢膩。四者真實斷□□□、□□楊枝能消口氣。五者正信決定無□、□□□摩身能避諸風。六者謂柔和忍□、□□□□□□皮膚。七者謂慚愧悔諸惡業、□□□□□□體。如上七法、是經中秘密之□。□□□□爲諸大乘利根者說、非爲小智下□□□、□□今人無能解悟。其溫室者、即身是也。所□燃□□火、溫淨戒湯、沐浴身中真如佛性、受持七法、以自莊嚴。當□□□、□明上智、皆悟聖意。如說修行、功德成就、俱登□果。今時衆生莫測其事、將世間水洗質□□、自謂依經、豈非誤也。且真如佛性、非是凡□、煩□塵垢、本來無相。豈可將質礙水、洗無爲身、事

不應、云何悟道。若言身清淨者、當觀此身、本因貪□不淨□、□駢闊、內外充滿。若也洗此身求□□□、□洗塗、灑盡方淨。以此驗之、明知洗□□□□□。

(十四) 問、經說言至心念佛、必得生西方淨□。□□□□□佛、何假觀心、求於解脫。

答、夫念佛者、□□□□□。了義爲正、不了義爲邪。正念必□□□□、□□云何達彼。佛者覺也。所謂覺察□□、□□惡念。念者憶也。所謂憶持戒行、不□精勤。了□□□、名爲念。故知念在於心、不在於言。因筌求魚、得魚云筌。因言求意、得□□言。既稱念佛之名、須知念佛之道。若心無實、□誦空名、三毒內臻、人我填臆。將無明志。心、不見□、□□虛功。且如誦之與念、義理懸殊。在□□□、在心□念。故知念從心起、名爲覺行之門。誦在口中、即是音聲之相。執相求理、終無處。

(結) 故知過去諸聖所修、皆非外說、唯□□□。□心是衆善之源、即心爲萬德之□。□□□□□、□息心生、三界輪迴、亦從心起。心是出□□□□、□是解脫之關津。知門戶者、豈慮難成。□□□□、何憂不達。竊見今時淺識、唯知事□□□。□□財寶、多傷水陸、妄營像塔、虛□□□。□□疊泥、圖青畫綠、傾心盡力、損已□□。□□□□、何曾覺悟。見有爲則勤勤□著、□□相則□□□□。且貪相世之小慈、豈覺當來之大苦。此之修覺、徒自疲勞、背正歸□、誰□□福。但能攝心內照、覺觀明、絕三毒永使□□、閉六□不令侵擾。自然恒□功德、種種莊嚴、無□

□門、一□成就。超凡證聖、目擊非遙、悟在須臾、□□□首。眞門幽秘、寧可具陳、略述觀心、詳其少分。

破相論

此論乃是諸經骨體、究□□□。□□□□、□名

頓悟。（下欠）……

## 資料二 日本所伝『破相論』対校テキスト

達磨大師破相論<sup>1</sup>

1菩提達磨大師說破相論<sup>2</sup>・達磨和尚觀心破相論<sup>3</sup>・第二門破相論<sup>4</sup>・2論十可禪門序<sup>5</sup>・可禪師門無名僧序<sup>6</sup>・可禪師問無名僧序<sup>7</sup>

(序) 觀夫三界所尊者謂之道、萬法同觀者謂之門。道在身心、理無繩

墨、真如幽隱、超對治門。不用言無以鑒其幽、不立心無以授法印。若迷名滯相、則三界輪迴、趣寂沈空、自埋佛性。般若不有而

超有、有之因妙用不無、乃越空空之境。住心執有者、自欺於聖、

不免輪迴。滅色取空者、有詆於凡、沈埋苦海。是以達磨和尚、愍

彼迷津、說破相論、無名僧於言下抄錄、令後學者見無相之心。一

見本心、永超生死。大圓鏡智、不待修成。清淨法身、不由漸證。

空有不捨、二諦恒存。<sup>8</sup> 不住真俗、現前無漏。<sup>9</sup> 痛哉痛哉。迷于聖

地、高推衣內懷珠、十方馳騁、宅中寶藏、都不覺知。不認無生、

沈埋累劫、審尋茲論、目擊道存。<sup>10</sup> 若自誇心王、佛也不能救汝。<sup>11</sup>

<sup>12</sup>

眞

1 この序文ナシ<sup>◎</sup> 2 用<sup>ハ</sup>因<sup>ハ</sup>因<sup>ハ</sup> 3 以鑒

II 笠<sup>ハ</sup>・以笠<sup>ハ</sup>笠<sup>ハ</sup> 4 住心執有<sup>ハ</sup>・有住心<sup>ハ</sup>・

任心著相<sup>ハ</sup>・損<sup>ハ</sup> 5 沈<sup>ハ</sup>輪<sup>ハ</sup> 6 彼<sup>ハ</sup>被

II 笠<sup>ハ</sup>・7 學<sup>ハ</sup>覺<sup>ハ</sup> 8 恒存<sup>ハ</sup>・常存<sup>眞</sup><sup>ハ</sup> 9 痛哉

痛哉<sup>ハ</sup>・痛痛哉哉<sup>ハ</sup> 10 于<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>殘<sup>ハ</sup> 11 目

擊<sup>ハ</sup>・因繁<sup>ハ</sup>・目擊程<sup>ハ</sup> 12 自十不信<sup>ハ</sup>・長<sup>ハ</sup>

(一) 論曰、若復有人志求佛道者、當修何法、最爲省要。

答、唯觀心一法、總攝諸法、最爲省要。

(二) 問曰、何一法能攝諸法。

答、心者萬法之根本。一切諸法唯心所生、若能了心則萬法俱備。猶如大樹所有枝條、及諸花果、皆悉依根。<sup>3</sup> 栽樹者存根而始生子、<sup>4</sup> 伐樹者去根而必死。若了心修道、則少力而易成。不了心而修、費功而無益。故知一切善惡、皆由自心、心外別求、終無是處。<sup>9</sup>

(三) 問曰、何觀心稱之爲了。

答、菩薩摩訶薩、行深般若波羅蜜多時、了四大五陰、本空無我。了見自心起用、有二種差別。<sup>5</sup> 云何爲二。一者淨心、二者染心。此二種心法、亦自然本來俱有、雖假緣合、互相因待。淨心恒樂善因、染體常思惡業。若不受所染、則稱之爲聖、遂能遠離。

1 論曰 || 問曰 ④ 2 志 || 至 ④ 3 者 || 十

シ ④ 4 答 || 答曰 ④

1 問曰 || 問 ④ 2 何 || 云何 ④ 3 何 ④

4 栽 || 裁 ④ 5 伐 || 及伐 ④ 乃伐

6 者 || ナシ ④ 7 少 || 省 ④ 8 是

8 修十道則 ④ 道則 ④ 9 是處 || 處 ④ 捲

1 問曰 || 問 ④ 2 何 || 云何 ④ 3 何 ④

4 栽 || 裁 ④ 5 伐 || 及伐 ④ 乃伐

6 者 || ナシ ④ 7 少 || 省 ④ 8 是

8 修十道則 ④ 道則 ④ 9 是處 || 處 ④ 捲

1 問曰 || 問 ④ 2 何 || 云何 ④ 3 何 ④

4 栽 || 裁 ④ 5 伐 || 及伐 ④ 乃伐

6 者 || ナシ ④ 7 少 || 省 ④ 8 是

8 修十道則 ④ 道則 ④ 9 是處 || 處 ④ 捲

11 體十雖 ④

諸苦、證涅槃樂。若隨染心造業、受其纏覆、則名之爲凡、沈淪<sup>12</sup>

1.2 淪 || 輸                       <img alt="square icon" data-bbox="859 9095

出入諸根、貪著萬境、能成惡業、障真如體、故名六賊。<sup>5</sup> 一切衆生由此三毒六賊、惑亂身心、沈沒生死、輪迴六趣、受諸苦惱。<sup>6</sup>  
由如江河、因小泉源、涓流不絕、乃能弥漫波濤萬里。若復有人斷其本源、即衆流皆息。求解脫者、能轉三毒爲三聚淨戒、轉六賊爲六波羅蜜。<sup>7</sup> 自然永離、一切諸苦。<sup>8</sup>

(五) 問、六趣三界、廣大無邊、若唯觀心、何由免無窮之苦。

答、三界業報、唯心所生。本若無心、於三界中、即出三界。<sup>1</sup> 其三界者、即三毒也。貪爲欲界、嗔爲色界、癡爲無色界、故名三界。<sup>2</sup> 由此三毒造業輕重、受報不同、分歸六處、故名六趣。<sup>3</sup>

(六) 問、云何輕重分之爲六。

答、衆生不了正因、迷心修善、未免三界、生三輕趣。云何三輕趣。所謂迷修十善、妄求快樂、未免貪界、生於天趣。迷持五戒、妄起愛憎、未免嗔界、生於人趣。迷執有爲、信邪求福、未

5 境 || 鏡鏡 6 一切 || ナシ因 7 惑 || 或眞  
8 六趣 || 三趣 ◎◎眞◎ 9 由 || 猶◎ 10 小 ||  
少毘◎眞眞◎ 11 涓 || 消毘眞 12 蜜 || 密眞  
眞 13 苦十法 ◎眞海◎

1 中 || 者◎ 2 出三界 || 中即出◎ 3 其三界  
|| ナシ◎眞・三界◎◎ 4 重受 || 受重◎

1 憎 || 增眞

免癡界、生阿修羅趣。如是三類、名三輕趣。云何三重。<sup>2</sup>

所謂縱<sup>3</sup>

2 重十趣<sup>4</sup> 3 縱<sup>5</sup> 修<sup>6</sup> 慢<sup>7</sup> 4 成<sup>8</sup> 感<sup>9</sup>

三毒心、唯造惡業、墮三重趣。若貪業重者、墮餓鬼趣。

嗔業重

感<sup>10</sup> 5 即得<sup>11</sup> 離苦<sup>12</sup> 慢<sup>13</sup> 貪<sup>14</sup>

者、墮地獄趣。癡業重者、墮畜生趣。如是三重、通前三輕、遂

六趣輪迴之苦、自然消滅、即得解脫。

成六趣。故知一切苦業、由自心生。但能攝心、離諸邪惡、三界六趣輪迴之苦、自然消滅、即得解脫。

(七) 問、如佛所說、我於三大阿僧祇劫、無量勤苦、方成佛道。云何今<sup>1</sup>

說唯只觀心、制三毒即名解脫。

答、佛所說言、無虛妄也。阿僧祇劫者、即三毒心也。<sup>3</sup> 胡<sup>4</sup> 言阿僧

祇、漢名不可數。此三毒心、於中有恒沙惡念、於一一念中、皆

爲一劫。<sup>5</sup> 如是恒沙不可數也、故言三大阿僧祇。真如之性、既被

三毒之所覆盖、若不超彼三大恒沙毒惡之心、云何名爲解脫。今

若能轉貪嗔癡等三毒心、爲三解脫、是則名爲得度三大阿僧祇

劫。<sup>6</sup> 末世衆生愚癡鈍根、不解如來三大阿僧祇秘密之說、遂言<sup>13</sup>

成<sup>10</sup> 佛、塵劫未期。<sup>14</sup> 豈不疑誤行人、退菩提道。<sup>15</sup>

- 1 阿<sup>1</sup> ナシ<sup>2</sup> 2 制三毒<sup>3</sup> 制毒<sup>4</sup> 而制三毒<sup>5</sup>  
3 即<sup>6</sup> ナシ<sup>7</sup> 慢<sup>8</sup> 慢<sup>9</sup> 慢<sup>10</sup> 慢<sup>11</sup> 慢<sup>12</sup> 慢<sup>13</sup> 慢<sup>14</sup> 慢<sup>15</sup> 慢<sup>16</sup> 慢<sup>17</sup> 慢<sup>18</sup>  
4 5 祇<sup>19</sup> + 劫<sup>20</sup> 6 劫<sup>21</sup> + 切<sup>22</sup> 慢<sup>23</sup> 7 恒<sup>24</sup> + 十河<sup>25</sup>  
8 言<sup>26</sup> = 云<sup>27</sup> 慢<sup>28</sup> 9 恒沙<sup>29</sup> = 恒河<sup>30</sup>  
10 末<sup>31</sup> = 未<sup>32</sup> 11 祇<sup>33</sup> + 劫<sup>34</sup> 12 13 言<sup>35</sup> = 云<sup>36</sup> 慢<sup>37</sup>  
14 未期<sup>38</sup> = 斯<sup>39</sup> 15 廿<sup>40</sup> 不<sup>41</sup> 不<sup>42</sup> 16 提<sup>43</sup> = 薩<sup>44</sup> 17 道<sup>45</sup> = ナシ<sup>46</sup>

(八) 問、菩薩摩訶薩、由持三聚淨戒、行六波羅蜜<sup>1</sup>、方成佛道。今令學者唯只觀心、不修戒行、云何成佛。

答、三聚淨戒者、即制三毒心也。制三毒成無量善聚、聚者會也。<sup>5</sup> 無量善法、普會於心、故名三聚淨戒。六波羅蜜者、即淨六根也。<sup>6</sup> 胡名波羅蜜<sup>9</sup>、漢名達彼岸。以六根清淨、不染六塵、即是度煩惱河、至菩提岸、故<sup>10</sup>六波羅蜜<sup>12</sup>。

(九) 問、如經所說三聚淨戒者、誓斷一切惡、誓修一切善、<sup>2</sup>度一切衆生。今者唯言制三毒心、豈不文義有乖也。<sup>3</sup>

答、佛所說是真實語。菩薩摩訶薩於過去因中修苦行時、爲對三毒發三誓願。<sup>4</sup> 斷一切惡、故常持戒、對於貪毒。誓修一切善、故常習、對於嗔毒。誓度一切衆生、故常修慧、對於癡毒。由持如是戒定慧等三種淨法、故能超彼三毒成佛道也。諸惡消滅名爲斷、<sup>7</sup>以能持三聚淨戒、則諸善具足、名之爲修。以能斷惡修善、則萬

1 蜜 || 密 ニシテ 2 戒 || ナシ ニ 3 毒十心 アハ  
4 聚者 || 者 ニ 5 也 || ナシ シ 6 故 || ナシ シ

7 蜜 || 密 ニシテ 8 即淨 || ナシ シ 9 即 シ 10 至 || 到 シ 11 名六 || 六 シ  
云六 ニシテ 12 蜜 || 密 ニシテ

ナシ シ 9 善十根 シ

行成就、自他俱利、普濟群生、故名解脱。<sup>11</sup> 則知所修戒行、不離於心、若自心清淨、則一切佛土皆悉清淨。故經云、心垢則衆生垢、心淨則衆生淨。欲得佛土、當淨其心、隨其心淨、則佛土淨也。<sup>14</sup> <sup>15</sup> 三聚淨戒、自然成就矣。<sup>17</sup>

(十) 問、如經所說六波羅蜜者、亦名六度。<sup>1</sup> 所謂布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧。今言六根清淨名波羅蜜者、若爲通會、又六度

<sup>7</sup> 者、其義如何。

答、欲修六度、當淨六根、先降六賊。<sup>9</sup> <sup>10</sup> <sup>11</sup> 能捨眼賊、離諸色境、名爲布施。能禁耳賊、於彼聲塵、不令縱逸、名爲持戒。能伏鼻賊、等諸香臭、自在調柔、名爲忍辱。能制口賊、不貪諸味、讚詠講說、名爲精進。能降身賊、於諸觸欲、湛然不動、名爲禪定。能調意賊、不順無明、常修覺慧、名爲智慧。六度者運也。<sup>16</sup> 六波羅蜜、<sup>17</sup> 喻若船筏、能運衆生達於彼岸、故名六度。

10 他    它	11 故名    名之	12 解脫    度
11 捐	12 爲度	13 則
12 得淨	13 故	14 得佛
13 土	14 佛	15 淨佛
14 也	15 ナシ	16 也
15 無	16 ナシ	17 無
16 ナシ	17 ナシ	18 ナシ
17 ナシ	18 ナシ	19 ナシ
18 ナシ	19 ナシ	10 他
19 ナシ	10 他	11 故名
10 他	11 故名	12 解脫
11 故名	12 解脫	13 則
12 解脫	13 則	14 得佛
13 則	14 得佛	15 淨佛
14 得佛	15 淨佛	16 也
15 淨佛	16 也	17 無
16 也	17 無	18 ナシ
17 無	18 ナシ	19 ナシ
18 ナシ	19 ナシ	10 他
19 ナシ	10 他	11 故名
10 他	11 故名	12 解脫



燈、晝夜六時遶塔行道、持齋、禮拜、種種功德、皆成佛道。若唯觀心、總攝諸行、說如是事、應虛妄也。

答、佛所說經、有無量方便。以一切衆生鈍根狹劣、不悟甚深之義、所以假有爲、喻無爲。若復不修內行、唯只外求、希望獲福、無有是處。

(1) 言伽藍者、西國梵語、此土翻爲清淨地也。若永除三毒、常淨六根、身心湛然、內外清淨、是名修伽藍。

(2) 鑄寫形像者、即是一切衆生求佛道也。所爲修諸覺行、仿像如來真容妙相、<sup>4</sup>豈鑄寫金銅之所作也。<sup>5</sup>是故求解脫者、以身爲爐、以法爲火、以智慧爲巧匠。<sup>8</sup>三聚淨戒六波羅蜜、<sup>9</sup>以爲模樣、鎔鍊身中真如佛性、遍入一切戒律模中。如教奉行、一無漏缺、自然成就真容之像。所謂究竟常住、微妙色身、非是有爲敗壞之法。若人求<sup>14</sup>道、不解如<sup>15</sup>是鑄寫真容、憑何輒言功德。

4 時十行道㊂ 5 佛||ナシ 6 唯||ナシ 7 妄||忘㊂ 8 內||因○眞・損殘 9 外求||外求

1 寫十寫㊂ 2 爲||謂㊂ 3 諸覺||覺諸 4

5 遣||是㊂ 6 故求||也求 7 者

◎

1 寫十寫是 2 爲||謂是 3 諸覺||覺諸 4  
5 遣||是是 6 故求||也求 7 者  
8 匠||道是・十以是 9 密||密是 10 以||ナシ 11 樣||揆是 12 微||微是 13 非||不 14 求十佛是 15 是||來是

(3) 燒香者<sup>2</sup>、亦非世間有相之香、乃是無爲正法之香也。<sup>3</sup>

薰諸臭穢、無明惡業、悉令消滅。<sup>4</sup> 其正法香者、有其五種。一者戒香、所謂能斷

諸惡、能修諸善。二者定香、所謂深信大乘、心無退轉。三者慧

香、所謂常於身心、內自觀察。四者解脫香、所謂能斷一切、無明

結縛。五者解脱知見香、所謂觀照常明、通達無礙。如是五種香、

名爲最上之香、世間無比。佛在世日、令諸弟子以智慧火、燒如是

無價寶香、供養十方諸佛。今時衆生、不解如來真實之義、唯將外  
火、燒世間沈檀薰陸質礙之香。<sup>7</sup> 希望福報、云何得。<sup>13</sup>

10 火、燒世間沈檀薰陸質礙之香。<sup>11</sup> 希望福報、<sup>12</sup> 云何得。<sup>13</sup>

(4) 散花者、義亦如是。所謂宣說正法、諸功德花、饒益有情、散沾一

切、於真如性、普施莊嚴。此功德花、佛所讚歎、究竟常住、無彫

落期。若復有人、散如是花、獲福無量。若言如來令衆生、剪截繪

彩、傷損草木、以爲散花、無有是處。所以者何。持淨戒者、於

諸天地、森羅萬像、不令觸犯、誤犯者猶獲大罪。況復今者、故

1 燒 || 又燒 2 者 || ナシ 3 之 || ナシ

4 其 || ナシ 捐 5 有其 || 有

6 結 || ナシ 7 世 || ナシ

8 十 || ナシ 9 之 || ナシ 10 燒十於

11 碩之 || 碩 12 報 || 業

13 得 || 可得乎 可得 14 誤 || 若誤 捐

1 散 || 又散 捐

2 宣 || 演 真

3

4 於 || ナシ

5 性 || 情

6 此

7 讚歎 || 稱讚

8

9 剪 || 前

10 以 || ナシ

11 是

12 淨 || ナシ

13 森 || 參 參

14 誤 || 若誤 捐

毀淨戒、傷萬物求於福報、欲益返損、豈有是乎。<sup>15</sup>

15 傷十損<sup>④</sup>是十處<sup>④</sup>

16 是十處<sup>④</sup>

(5) 又長明燈者、即正覺心也。以覺明了、喻之爲燈。是一切求解脫者、以身爲燈臺、心爲燈炷、增諸戒行、以爲添油。智慧明達、喻如燈火當然。如是真正覺燈、照破一切無明癡暗。能以此法、轉<sup>12</sup>相開示、即是一燈燃百千燈。以燈續然、然燈無盡、故號長明。

過去有佛、名爲然燈、義亦如是。愚癡衆生、不會如來方便之說、專行虛妄、執著有爲。遂然世間蘇油之燈、以照空室、乃稱<sup>21</sup>依教、豈不謬乎。所以者何。佛放眉間一毫相光、上能照萬八千世界、豈假如是蘇油之燈、以爲利益。審察斯理、應不然乎。

(6) 又六時行道者、所謂六根之中於一切時、常行佛道。修諸覺行、調伏六根、長時不捨、名爲六時。遠塔行道者、塔是身心也。當令覺慧、巡遠身心、念念不停、名爲遠塔。過去諸聖、皆行此道、得<sup>10</sup>至涅槃。今時世人、不會此理、曾不內行、唯執外求。將質礙身<sup>11</sup>遠世間塔、日夜走驟、徒自疲勞、而於真性、一無利益。<sup>14</sup>

1 又 <sup>1</sup> ナシ <sup>④</sup> 長 <sup>④</sup> 内 <sup>④</sup>	2 以覺 <sup>2</sup>   覺 <sup>④</sup> 長 <sup>④</sup> ・覺之 <sup>④</sup>	3 是十故 <sup>④</sup>	4 求解 <sup>3</sup>   解 <sup>④</sup>	5 以 <sup>4</sup> ナ
シ <sup>④</sup> 身 <sup>5</sup> 爲 <sup>6</sup> 身 <sup>7</sup> 爲 <sup>8</sup>	6 身爲 <sup>9</sup> 身 <sup>10</sup> ・心爲 <sup>11</sup> 心 <sup>12</sup>	7 心爲 <sup>13</sup> 爲 <sup>14</sup>		
8 慧 <sup>15</sup>   ナシ <sup>16</sup>	9 然 <sup>17</sup>   燃 <sup>18</sup> 内 <sup>19</sup> ・燈 <sup>20</sup> 内 <sup>21</sup>	10 照破 <sup>22</sup>   而照 <sup>23</sup>	11 法十輪 <sup>24</sup>	12 轉 <sup>25</sup>   次第 <sup>26</sup>
13 以燈續然 <sup>27</sup>   ナシ <sup>28</sup>	14 燈 <sup>29</sup>   燒 <sup>30</sup>	15 然 <sup>31</sup>		
燃 <sup>32</sup> 長 <sup>33</sup> 燈 <sup>34</sup> 内 <sup>35</sup>	16 然燈 <sup>36</sup>   燃燈 <sup>37</sup> ・燈 <sup>38</sup> 内 <sup>39</sup>	17 然 <sup>40</sup>   燃 <sup>41</sup> 内 <sup>42</sup> ・燈 <sup>43</sup> 内 <sup>44</sup>	18 然 <sup>45</sup>   燃 <sup>46</sup> 内 <sup>47</sup> ・燈 <sup>48</sup> 内 <sup>49</sup>	
19 愚 <sup>50</sup>   遇 <sup>51</sup>	20 然 <sup>52</sup>   燃 <sup>53</sup> 内 <sup>54</sup> ・燈 <sup>55</sup> 内 <sup>56</sup>	21 然 <sup>57</sup>   燃 <sup>58</sup> 内 <sup>59</sup> ・燈 <sup>60</sup> 内 <sup>61</sup>	22 佛 <sup>62</sup>   ナシ <sup>63</sup>	23 上 <sup>64</sup>   ナシ <sup>65</sup>
十爲 <sup>66</sup>	24	25 然 <sup>67</sup>   照 <sup>68</sup>		
八千 <sup>69</sup>   千八 <sup>70</sup>				
1 又十晝夜 <sup>71</sup>	2 修 <sup>72</sup>   略 <sup>73</sup> ・損 <sup>74</sup>	3 遠塔行道		
ナシ <sup>75</sup> ・十者 <sup>76</sup>	4 者 <sup>77</sup>   行道者 <sup>78</sup> ・損 <sup>79</sup>	5 塔 <sup>80</sup>		
ナシ <sup>81</sup> ・心 <sup>82</sup>   ナシ <sup>83</sup> ・行 <sup>84</sup>	7 令 <sup>85</sup>			
10 得 <sup>86</sup>   ナシ <sup>87</sup>	8 慧 <sup>88</sup>   ナシ <sup>89</sup> ・行 <sup>90</sup>	9 行此 <sup>91</sup>   此行 <sup>92</sup>		
11 繫 <sup>93</sup> 十時 <sup>94</sup>	12 時 <sup>95</sup>   ナシ <sup>96</sup>			
14 徒 <sup>97</sup>   待 <sup>98</sup> ・損 <sup>99</sup>				

(7)

又持齋者、當須會意、不達斯理、徒爾虛功。齋者齊也。所謂齋正身心、不合散亂。持者護也。所謂於諸戒行、如法護持。必須外禁

六情、內制三毒、勤覺察淨身心。<sup>3</sup>了如是義、名爲持齋。<sup>4</sup>又持齋

者、食有五種。一者法喜食、所爲依持正法、歡喜奉行。<sup>7</sup>二者禪悅

食、所爲內外澄寂、身心悅樂。<sup>8</sup>三者念食、所謂常念諸佛、心口相

應。四者願食、所謂行住坐卧、常求善願。五者解脫食、所謂心常

清淨、不染俗塵。<sup>10</sup>此五種食、名爲齊食。若復有人、不食如是五

種淨食、自言持齋、無有是處。<sup>11</sup>唯斷於無明之食、若輒觸者、名

爲破齋。<sup>12</sup>若有破、云何獲福。世有迷人、不悟斯理、身心放逸、

諸惡皆爲。貪欲恣情、不生慚愧、唯斷外食、自爲持齋、必無是

事。<sup>19</sup>

(8) 又禮拜者、<sup>1</sup>當如是法也。必須理體內明、事隨權變、<sup>2</sup>理有行藏、會

<sup>2</sup> 3

5

- 1 又 || ナシ ◎ 2 當 || 云 ◎ 3 是 || ナシ ◎  
4 權 || 獲 ◎ 5 理有行藏 || ナシ ◎

1 意 || ナシ ◎ 2 達十意 ◎ · || 違 ◎ 3 毒十懥

4 察 || 蜜 ◎ · + 清 ◎ 5 身 || ナシ ◎  
6 又持齋者 || ナシ ◎ 7 爲 || 謂 ◎ 8 爲 || 謂

9 口 || 心 ◎ 10 俗 || 浴 ◎ · 欲 ◎  
11 齋食 || 指 ◎ 12 淨 || ナシ ◎ 13 於 ||

ナシ ◎ 14 若輒觸 || 輒作解 ◎ · 指 ◎  
15 齋十

16 若十亦 ◎ 17 諸惡皆爲 || 皆爲諸惡  
18 惡 || ナシ ◎ 19 事 || 處 ◎

如是義、乃名依法。夫禮者敬也、拜者伏也。所謂恭敬眞性、屈伏無明、名爲禮拜。若能惡情永滅、善念恒存、雖不現相、名爲禮拜。<sup>6</sup>其相即法相也。世尊欲令世俗、表謙下心、亦爲禮拜。故須屈伏外身、示內恭敬、<sup>7</sup>舉外明內、性相相應。若復不行理法、唯執外求、內則放縱嗔癡、常爲惡業。外即空勞身相、詐現威儀、無慚於聖、徒誑於凡。不免輪迴、豈成功德。

(十三) 問、如溫室經說洗浴衆僧、獲福無量。此則憑於事法、功德始成。若爲觀心、可相應否。

答、洗浴衆僧者、非洗世間有爲事也。<sup>1</sup>世尊當爾爲諸弟子、說溫室經、欲令受持、洗浴之法。<sup>2</sup>故假世事、比喻真宗、隱說七事、<sup>3</sup>供養功德。其七事云何。一者淨水、二者燒火、三者澡豆、四者楊枝、五者淨灰、六者蘇膏、七者內衣。舉此七法、喻於七事。<sup>10</sup>

一切衆生、由此七法、沐浴莊嚴、能除毒心、無明垢穢。其七法者、一謂淨戒洗蕩愆非、猶如淨水濯諸塵垢。二者智慧觀察內

6 即 || ナン 7 令 || 食圓 8 示十示圓

9 舉 || 覺 10 相 || ナシ圓 11 放 || 故

12 嘴 || 貪 13 慶圓 14 食圓 15 捐殘  
16 請 || 者謂圓、者圓

17 聞圓 18 捐殘

19 嘴

20 慶圓

21 食圓

22 捐殘

23 聞圓

24 捐殘

25 聞圓

26 捐殘

27 聞圓

28 捐殘

外、由如然火能溫淨水。三者分別簡棄諸惡、猶如澡豆能淨垢  
膩。四者真實斷諸妄想、如嚼楊枝能淨口氣。五者正信決定無  
疑。<sup>22</sup>由如淨灰摩身能避諸風。<sup>23</sup>六者謂柔和忍辱、由如蘇膏通潤皮  
膚。<sup>24</sup>七者謂慚愧悔諸惡業。<sup>25</sup>猶如內衣遮醜形體。如上七法、是經  
中秘密之義。<sup>26</sup>如來當爾爲諸大乘利根者說、非爲小智下劣凡夫、  
所以今人無能解悟。<sup>27</sup>其溫室者、即身是也。所以燃智慧火、溫淨  
戒湯、沐浴身中真如佛性、受持七法、以自莊嚴。<sup>28</sup>當爾比丘、聰  
明上智、皆悟聖意。<sup>29</sup>如說修行、功德成就、俱登聖果。<sup>30</sup>當時衆生  
莫測其事、將世間水洗質礙身、自謂依經、豈非誤也。且真如佛  
性、非是凡形、煩惱塵垢、本來無相。豈可將質礙水、洗無爲  
身、事。<sup>31</sup>不應、云何悟道。若欲身得淨者、當觀此身、本因貪欲  
不淨所生、臭穢駢闊、內外充滿。<sup>32</sup>若也洗此身求於淨者、猶如洗  
塹、塹盡方淨。以此驗之、明知洗外非佛說也。

(十四) 問、經說言至心念佛、必得往生西方淨土。以此一門即應成佛。

17 然    燃 <small>残</small> <small>日</small> 真 <small>六</small>	18 如    ナシ <small>日</small> <small>損</small> <small>残</small>
19 猶 <small>因</small> <small>・</small> <small>損</small> <small>残</small>	20 如嚼    猶如 <small>因</small> <small>・</small> <small>損</small> <small>残</small>
21 淨    消	22 疑    癒 <small>日</small> <small>長</small> <small>真</small> <small>六</small> <small>・</small> <small>損</small> <small>残</small>
23 由	24 能避諸風    能障諸風 <small>日</small> <small>長</small> <small>障</small> 風
25 辱十甘受 <small>因</small>	26 由    猶 <small>因</small> <small>・</small> <small>損</small> <small>残</small>
26 由    猶 <small>因</small> <small>・</small> <small>損</small> <small>残</small>	27 潤
27 潤	28 謂    ナシ <small>因</small>
28 謂    ナシ <small>因</small>	29 如來    皆是
29 如來    皆是	30 小    少 <small>長</small> <small>因</small>
30 小    少 <small>長</small> <small>因</small>	31 爾    日 <small>六</small> <small>・</small> <small>損</small> <small>残</small>
31 爾    日 <small>六</small> <small>・</small> <small>損</small> <small>残</small>	32 皆
32 皆	33 非是    是非 <small>日</small> <small>・</small> <small>損</small> <small>残</small>
33 非是    是非 <small>日</small> <small>・</small> <small>損</small> <small>残</small>	34 惱塵
34 惱塵	35 相    ナシ <small>残</small>
35 相    ナシ <small>残</small>	36 欲    言 <small>残</small> <small>日</small> <small>長</small> <small>真</small>
36 欲    言 <small>残</small> <small>日</small> <small>長</small> <small>真</small>	37 得    清 <small>残</small> <small>日</small>
37 得    清 <small>残</small> <small>日</small>	38 開    ナシ <small>日</small>
38 開    ナシ <small>日</small>	39 若也    也
39 若也    也	40 若 <small>日</small> <small>・</small> <small>真</small> <small>六</small>
40 若 <small>日</small> <small>・</small> <small>真</small> <small>六</small>	41 問十如 <small>因</small>
41 問十如 <small>因</small>	42 說    ナシ <small>圓</small>
42 說    ナシ <small>圓</small>	43 往    ナシ <small>残</small>
43 往    ナシ <small>残</small>	44 方    土 <small>日</small>

何假觀心<sup>5</sup>、求於解脫。

答、夫念佛者、當須正念。了義爲正、不了義爲邪。正念必得往生、邪念云何達彼。<sup>7</sup><sup>8</sup>佛者覺也。所謂覺察身心、勿令起惡。<sup>9</sup>念者憶也。<sup>11</sup><sup>12</sup>所謂憶持戒行、不忘精進勤。<sup>13</sup>了如是義、名爲念。故知念在於心、不在於言。<sup>15</sup>因筌求魚、得魚忘筌。<sup>16</sup>因言求意、得意忘言。<sup>19</sup>既稱念佛之名、須知念佛之道。若心無實、口誦空名、三毒內臻、人我填臆。將無明心、不見佛、徒爾潰功。<sup>20</sup>且如誦之與<sup>21</sup>念、義理懸殊。在口曰誦、在心曰念。故知念從心起、名爲覺行之門。誦在口中、即是音聲之相。執相求理、終<sup>25</sup>是無處。

(結) 故知過去諸聖所修、皆非外說、唯只推心。即心是衆善之源、即心

爲萬德之主。涅槃常樂、由息心生、三界輪迴、亦從心起。心是出世之門戶、心是解脫之關津。知門戶者、豈虛難成。<sup>11</sup>知關津者、何憂不達。<sup>12</sup>竊見今時淺識、唯知事相爲功。廣費財寶、多傷水陸、妄營像塔、虛役人夫。積木疊泥、圖青畫綠、傾心盡力、損

5 觀    ナシ	6 了義    イ	7 達    到	義
8 彼岸哉	9 佛	10 惠十念	11 所謂
14 岸哉	15 正	12 也	13 在勤
16 墓	17 與	18 進勤	19 意忘
14 妄	15 真	16 念	17 言
15 妄	16 真	18 意	19 忘
14 妄	15 真	20 不見	21 向外求
14 妄	15 真	22 與	23 曰
14 妄	15 真	24 念	25 相
14 妄	15 真	26 是	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真	17 真	ナシ
14 妄	15 真	18 真	ナシ
14 妄	15 真	19 真	ナシ
14 妄	15 真	20 真	ナシ
14 妄	15 真	21 真	ナシ
14 妄	15 真	22 真	ナシ
14 妄	15 真	23 真	ナシ
14 妄	15 真	24 真	ナシ
14 妄	15 真	25 真	ナシ
14 妄	15 真	26 真	ナシ
14 妄	15 真</td		

己迷他。<sup>17</sup> 未解慚愧、何曾覺悟。見有爲則勤勤愛著、說無相則兀

兀如迷。且貪現世之小慈、豈覺當來之大苦。此之修學、徒自疲

勞、背正歸邪、誰言獲福。但能攝心內照、覺觀<sup>24</sup>外、絕三毒永使

銷亡、閉六賊不令侵擾。自然恒沙功德、種種莊嚴、無數法門、<sup>25</sup>

一一成就。超凡證聖、目擊非遙、悟在須臾、何煩皓首。真門幽

秘、寧可具陳、略述觀心、詳其少分。<sup>26</sup>

跋文（金沢文庫建長本を底本とする）<sup>1</sup>

此論乃是諸經骨體、究竟真門。依此教行、即名頓悟。縱有退失、猶勝二乘。時時看之、甚有道理、亦是默傳心印。時大唐會昌五年、乙丑歲春二月八日寫。遇奉傳上日本和尚、結當來之因。越洲判懸汲洲子龍共朗書。<sup>2</sup>

達磨大師破相論<sup>3</sup>

17 他||它Ⓐ・損Ⓑ 18 相||爲Ⓐ 19 且||但Ⓐ

20 現||相Ⓑ 21 此之||如此Ⓐ 22 學||覺Ⓑ

23 誰||誑Ⓑ・與Ⓐ 24 外明||明Ⓑ・外Ⓑ 25 法

門||ナシⒷ・損Ⓑ 26 超||越Ⓑ 27 門||如Ⓓ

Ⓐ 28 略述||ナシⒶ 29 詳||說Ⓐ 30 分+

而說偈言、我本求心心自持、求心不得待心知。佛性不從心外得、心生便是罪生時。我本求心不求佛、了知三界空無物。若欲求佛但求心、只這心心心是佛Ⓐ

1 跋文||ナシⒷ・損Ⓑ 2 懸||縣Ⓐ・損Ⓑ 3 龍共

||龔Ⓓ 4 破相論Ⓑ・與Ⓐ・達磨和尚觀心破相論Ⓓ

(良圓) 5 論十一卷 建仁元年七月廿九日已時書了、執筆大甫丸Ⓓ・一交點了、建長四年六月廿四日未時書了、執筆夜叉王丸Ⓓ・一卷Ⓓ・終Ⓓ

## 資料三 朝鮮所伝『觀心論』対校テキスト

觀心論<sup>1</sup>

(内題) 達摩大師觀心論一卷

1 觀心論 || 達摩大師觀心論開卷  
2 達摩大師觀心論一卷 || 觀心論  
初祖達摩大師說法傳

(一) 惠可問曰、若有人志求佛道、當修何法、最爲省要。

師答曰、唯觀心一法、總攝諸行、名爲省要。

(二) 問、云何一法總攝諸行。<sup>3</sup>

師答曰、心者萬法之根本也。一切諸法唯心所生、若能了心萬行俱備。猶如大樹所有枝條、及諸花果、皆悉因根。栽樹者存根而始生、伐樹者去根而必死。若了心修道、則省功而易成。若不了心而修道、乃費功而無益。故知一切善惡、皆由自心、心外別求、終無是處。

(三) 又問曰、云何觀心稱之爲了。

3 問 || 問曰 妥開法傳

答曰、菩薩摩訶薩、行深般若波羅蜜多時、了四大五蘊、本空無我。了見自心起用、有二種差別。云何爲二。一者淨心、二者染心。其淨心者、即是無漏真如之心。其染心者、即是有漏無明之心。此二種心、自然本來俱有、雖假緣和合、互不相生。淨心恒樂善因、染心常思惡業。若真如自覺、覺不受所染、則稱之爲聖、遂能遠離諸苦、證涅槃樂。若隨染造惡、受其纏覆、則名之爲凡、於是沉淪三界、受種種苦。何以故。由被染心、障真如體。故十地經云、衆生身中有金剛佛性、猶如日輪體明圓滿、廣大無邊、只爲五陰黑雲所覆、猶如瓶內燈光、不能顯現。又涅槃經云、一切衆生皆有佛性、無明覆故、不得解脫。佛性者覺也。但能自覺、覺智明了、離其所覆、則名解脫。故知一切諸善、以覺爲根、因其覺根、遂能顯現諸功德樹、涅槃之果、由此而成。如是觀心、可名爲了。

(四) 又問曰、上說真如佛性、一切功德因覺爲根。未審無明之心、一切諸惡、以何爲根。

答曰、無明之心、雖有八萬四千煩惱情欲、恒沙衆惡、無量無邊。取要言之、皆因三毒以爲根本。其三毒者、即貪嗔癡也。此三毒心、自然本來具有一切諸惡。

4 被 || 彼㊂團㊂法㊂禪

猶如大樹根雖是一、所生枝葉、其數無邊。彼三毒根、一一根中、生諸惡業、百

千萬億倍過於前、不可爲喻。如是三毒於一本體、自爲三毒。若□□六根、亦名

5

六賊、六賊者則六識也。由此六識、出入諸根、貪著萬境、然成惡業、障真如

應現

體、故名六賊。一切衆生由此三毒、及以六賊、惑亂身心、沉淪生死、輪迴六

趣、受諸苦惱。猶如江河、因小泉源、涓流不絕、乃能弥漫波濤萬里。若復有人

斷其根源、則衆流皆息。求解脫者、能轉三毒爲三聚淨戒、能轉六賊爲六波羅蜜。自然永離、一切諸苦。

(五) 又問曰、三毒六賊、廣大無邊、若唯觀心、云何免彼無窮之苦。

答曰、三界業報、唯心所生。若能了心、於三界中、則出三界。其三界者、則三毒也。貪爲欲界、嗔爲色界、癡爲無色界。由此三毒心、結集諸惡、業報成就、輪迴六趣、故名爲三界。又三毒造業輕重、受報不同、分歸六處、故名六趣。

(六) 又問<sup>6</sup>、云何輕重分之爲六。

答曰、若有衆生、不了正因、迷心修善、未免三界、生三輕趣。云何三輕。所謂

5 則二即法身

6 問十曰法身

迷修十善、妄求快樂、未免貪界、生於天趣。迷持五戒、妄起愛憎、未免嗔界、生於人趣。迷執有爲、信邪求福、未免癡界、生於修羅趣。如是三類、名爲三趣。<sup>7</sup>云何三重。所謂縱三毒心、唯造惡業、墮三重趣。若貪業重者、墮餓鬼趣。

嗔業重者、墮地獄趣。癡業重者、墮畜生趣。如是三重、通前三輕、遂成六趣。嗔。雲。業。重。者。墮。地。獄。趣。癡。業。重。者。墮。畜。生。趣。如。是。三。重。通。前。三。輕。遂。成。六。趣。

故知惡業、由自心生。但能攝心、離諸邪惡、三界六趣輪迴之苦、自然消滅。能盡諸苦、則名解脫。<sup>8</sup>

(七) 又問曰、如佛所說、我於阿僧祇劫、無量勤苦、方成佛道。云何今說唯除三毒、則名解脫。

答曰、佛所說言、無虛妄也。阿僧祇者、即三毒心也。胡名阿僧祇、漢言不可數。此心中有恒沙惡念、一一念中、皆有一劫。恒沙者、不可數也。以毒惡念如恒沙、故言不可數也。<sup>10</sup>真如之性、既被三毒之所覆、若不超彼恒河沙惡之念、云何名解脫。今者能除貪嗔癡等三毒心、是則名爲度得三大阿僧祇劫。末世衆生愚癡鈍根、不解如來甚深妙義、三阿僧祇秘密之說、遂言歷此塵劫、方得成佛。末劫豈不疑誤修行之人、退菩提道也。

7 名 || 各圓

8 心生 || 生心 圓

9 以十三圓

10 也 || ナシ 圓

11 被 || 彼 圓

12 密 || 蜜 圓

(八) 又問曰、菩薩摩訶薩、由持三聚淨戒、行六波羅蜜、方成佛道。今令學者唯只觀<sup>13</sup>

心、不修戒行、云何成佛。

答曰、三聚淨戒者、則制三毒心也。制一毒成無量善、聚者會也。以能制三毒、

即有三無量善、普會於心、名三聚淨戒。六波羅蜜者、即淨六根。胡言波羅蜜、

漢言達彼岸。以六根清淨、不染世塵、即是出煩惱、便至彼岸也、故名六波羅

蜜。

(九) 又問曰、如經所說三聚淨戒者、誓斷一切惡、誓修一切善、誓度一切衆生。今者

唯言制三毒心、豈不文義有所乖也。

答曰、佛所說經是真實語、應無謬也。菩薩摩訶薩於過去因中修菩薩行時、爲對

三毒發三誓願、持三聚淨戒。常修戒、對貪毒誓斷一切惡故。常修定、對嗔毒誓

修一切善故。常修慧、對癡毒誓度一切衆生故。由持如是戒定慧等三種淨法、故

超彼三毒惡業成佛道也。以能制三毒、即諸惡消滅、故名之爲斷。以能持三聚淨

戒、即諸善具足、故名之爲修。以能斷惡修善、則萬行成就、自他俱利、普濟群

生、故名之爲度。故知所修戒行、不離於心、若自心淨、一切衆生皆悉清淨。故

13 戒 || 我

14 只 || 持

15 言 || 名 開 法

16 定 || 云

經云、心垢即衆生垢、心淨即衆生淨。又云、欲淨佛土、先淨其心、隨其心淨、<sup>17</sup>

則佛土淨。若能制得二種毒心、三聚淨戒自能成就。

(十) 又問曰、如經所說六波羅蜜者、亦名六度。所謂布施、持戒、忍辱、精進、禪

定、智慧。今言六根清淨名爲六波羅蜜者、若爲通會、又度者、其義云何。

答曰、欲修六度、常淨六根、欲淨六根、先降六賊。<sup>18</sup> 能捨眼賊、離諸色境、心無  
固恪、名爲布施。能禁耳賊、於彼聲塵、不令縱逸、名爲持戒。能伏鼻賊、等諸  
香臭、自在調柔、名爲忍辱。能制舌賊、不貪邪味、讚詠講說、無疲厭心、名爲  
精進。能伏身賊、於諸觸欲、湛然不動、名爲禪定。能調意賊、不順無明、常修  
覺慧、樂諸功德、名爲智慧。又度者運也。六波羅蜜、喻若船筏、能運衆生達彼  
岸、故云六度。

(十一) 又問曰、經文所說釋迦如來爲菩薩時、曾飲三斗六升乳糜、方成佛道。即先因食

乳、後證佛果、豈唯觀心、得解脫也。

答曰、誠如所說、無虛妄也。必因食乳、然始成佛。佛所說食乳者、非是世間不

17 經 || 能開

18 常 || 當除

19 制 || 除

20 邪 || 邪

淨之乳、乃是真如清淨法乳。三斗者即三聚淨戒、六升者六波羅蜜。佛成道時、由食此清淨法乳、方證佛果。若言如來食於世間婬欲和合不淨羶腥之乳者、豈不成謗之甚乎。如來者自是金剛不壞無漏法身、永離世間諸苦、豈須如是不淨之乳、以免飢渴也。如經所說此牛不在高原、不在下濕、不食粟麥糠麩、不與特牛同群。其牛身作紫摩金色、言此牛者、則毗盧遮那佛也。以大慈悲憐愍一切、故於清淨法體中、流出如是三聚淨戒、六波羅蜜微妙法乳、乳養一切求解脫者。飲如是清淨之牛、清淨之乳、非獨如來飲之成道、一切衆生若能飲者、皆得成阿耨多羅三藐三菩提。

(十二) 又問曰、佛說經中令衆生修造伽藍、鑄寫形像、燒香、散花、燃長明燈、日夜六

時行道、持齋、禮拜、種種功德、皆成佛道。若唯觀心、總攝諸行、說如是事、應虛妄也。

答曰、佛所說經、有無量方便、以一切衆生鈍根狹劣、不悟甚深之義、所以假有爲事、喻無爲理。若復不修內行、唯只外求、希望獲福、無有是處。<sup>21</sup>

(1) 言伽藍者、梵音、此言清淨處也。若永除三毒、常淨六根、身心湛然、內外清淨、是則修伽藍也。

(2) 又鑄寫形像者、即一切衆生求佛道也。所謂修諸覺行、假像如來真容妙相、豈道鑄金銅之所作也。是故求解脫者、以身爲爐、以法爲火、以智慧爲工匠。三聚淨戒六波羅蜜、以爲摸樣、鎔鍊身中真如佛性、遍入一切戒律摸中。如教奉行、一無缺漏、自然成就真容之相。所謂究竟常住、微妙法身、非是有爲敗壞之法。22 若人求道、不解鑄寫真容、憑何輒言、成功德也。

(3) 燒香者、亦非世間有相之香、乃是無爲正法之香。薰諸臭穢、斷無明惡業、悉令消滅。其正法香、有五種。一者戒香、所謂能斷諸惡、能修諸善。二者定香、所謂深信大乘、心無退轉。三者慧香、所謂常於身心、內外觀察。四者解脫香、所謂能斷一切、無明結縛。五者解脫知見香、所謂覺察常明、通達無礙。如是五香、名最上香、世間無比。佛在世日、令諸弟子以智慧火、燒如是無價寶香、供養十方一切諸佛。今時衆生愚癡鈍根、不解如來真實之義、唯將外火、燒於世間

沉檀薰陸質凝之香。希望福報、云何可得。

(4) 又散花者、義亦如是。所謂演說正法、諸功德花、饒益有情、散治一切、真如之性、普施莊嚴。此功德花、佛所稱歎、究竟常住、無凋落期。若復有人、散如是

花、獲福無量。若言如來令諸弟子及衆生等、剪截艷綵、傷損草木、以爲散花、無有是處。所以者何。持淨戒者、於諸天地、森羅萬像、不令觸犯、悞損者由<sup>24</sup>獲大罪。況復今者、加毀淨戒、傷損萬物求於福報、欲益反損、豈有是乎。

(5) 又長明燈者、正覺心也。覺知明了、喻之爲燈。是故一切求解脫者、常以身爲燈

臺、心爲燈蓋、信爲燈炷、增諸戒行、以爲添油。智慧明達、喻如燈光常燃。<sup>25</sup>如是覺燈、照破一切無明癡暗。能以此法、轉相開悟、即是一燈燃百千燈。<sup>26</sup>以燈續

明、終無盡故、故號長明。過去有佛、名曰燃燈、<sup>27</sup>義亦如是。愚癡衆生、不會如來方便之說、專行虛妄、執著有爲。遂燃世間蘇油之燈、以照空室、乃稱依教、<sup>28</sup>豈不謬乎。所以者何。<sup>29</sup>佛放眉間一毫之光、尚照十方八千世界、若身光盡現、則

30 方 || 萬 因 種

29 者 || 有 開

28 燃 || 然 安 開 法 種

27 燃 || 然 安 開 法 種

24 由 || 自 安 開

23 治 || 治 安 開 法 種

(6) 又六時行道者、所謂六根之中於一切時、常行佛道。佛者覺也。即是修諸覺行、<sup>31</sup>

調伏六根、六情清淨、長時不捨、名爲六時行道。塔者身心也。常令覺慧、巡遶

身心、念念不停、名爲邊塔。過去諸聖、<sup>32</sup>曾行此道、得涅槃樂。

今時世人、求解

脫者、不會斯理、何名行道。竊見今時鈍根之輩、曾不內行、唯執外求。將質礙

身遶世間塔、日夜走驟、徒自疲勞、而於眞性、一無利益。迷愚之輩、甚誠可愍

歟。

(7) 又持齋者、當須會意、不達其理、徒施虛功。齋者齊也。所謂勤治身心、不令散<sup>34</sup>

亂。持者護也。所謂於諸戒行、如法護持。必須禁六情、制三毒、勤修覺察、清

淨身心。了如是義、可名爲齋。又持齋者、食有五種。一者法喜食、所謂依如來

正法、歡喜奉行。二者禪悅食、所謂內外澄寂、身心悅樂。三者念食、所謂常念

諸佛、心口相應。四者願食、所謂行住坐臥、常行善願。五者解脫食、所謂心常

清淨、不染世塵。持五淨食者、名爲齋食。若復有人、不食如是五種淨食、自言

持齋、無有是處。又有斷食、言斷食者、斷無明惡業之食。若輒觸者、名爲破

31 是 || 時 安 開 徒 禪

32 聖 || 賢 開

33 涅槃 || 槃 楚 安 開

34 當 || 常 安 開

齊。齋若有破、云何獲福。世有迷愚、不悟斯理、身心放逸、造諸惡業。貪恣欲情、不生慚愧、唯斷外食、自爲持齋、何異癡兒見爛壞死屍、稱言有命、必無是處。

35 怨 || 欲開  
36 異 || 以妄開

(8) 又禮拜者、常如法也。必須理體內明、事相外變、理不可捨、事有行藏、會如是義、乃名依法。夫禮者敬也、拜者伏也。所謂恭敬眞性、<sup>37</sup>屈伏無明、名爲禮拜。以恭敬故、不敢毀傷、以屈伏故、無令縱逸。若能惡情永滅、<sup>38</sup>善念恒存、雖不現相、常爲禮拜。其相者則身相也。欲爲令諸世俗、表謙下心、故須屈伏外身、視<sup>39</sup>恭敬相。用之則現、捨之則藏、舉外明內、性相應也。若復不行理法、唯執外問<sup>40</sup>、內則迷故、縱於貪嗔癡、常爲惡業。外則空顯身相、何名禮拜。無慚於聖故誑凡、不免輪墮、豈成功德。既無所得、云何求道。

(一三) 又問曰、如溫室經說洗浴衆僧、得福無量。此則憑何事法、功德始成。若唯觀心、可相應不。

答曰、洗浴衆僧者、非說世間有爲事也。世尊當爾爲諸弟子、說溫室經、欲令受

36 異 || 以妄開  
37 永 || 求開  
38 謙 || 見開  
39 視 || 現開  
40 問 || 門開 · 相開

持、洗浴之法。是故假諸世事、比喻真宗、隱說七事、供養功德。其七事者、一

41 比 || 譬 安開法師

者淨水、二者燃火、三者澡豆、四者楊枝、五者淨灰、六者蘇膏、七者內衣。舉

此七事、喻於七法。一切衆生、用此七法、沐浴莊嚴、能除三毒、無明垢穢。其

七法者、一者法戒洗溫愆非、猶如淨水去諸塵垢。二者智慧觀察內外、猶如燃火

能溫淨水。三者分別揀棄諸惡、由如澡豆能淨垢膩。四者真實斷諸妄語、由如楊

枝能消口氣。五者正信決疑無慮、由如淨灰摩身能避諸風。六者調息柔軟伏諸剛

強、由如蘇膏通潤皮膚。七者慚愧悔諸惡業、由如內衣遮蔽醜形。以上七事、並

是經中秘密之藏。如來當爾爲諸大乘利根者說、非爲小乘智淺下劣凡夫所說、所

以今人無能悟解。其溫室者、則身是也。所以燃智慧火、溫淨戒湯、沐浴身中真

如佛性、受持七法、以自莊嚴。當爾比丘、聰明利智、皆悟聖意。如說修行、功

德成就、俱登聖果。今時衆生愚癡鈍根、莫測斯事、將世間水洗質礙身、自言依

教、豈非誤也。且真如佛性、非是凡形、煩惱塵垢、本來無相。豈可將有礙水、

洗無明身、事不相應、云何悟道。若言礙身得清淨者、常觀此身、本因貪欲不淨

所生、臭穢駢閨、內外充塞。若洗此身求於淨者、猶如洗泥、終無得淨。如此驗

之、明知外洗非佛說也。

42 由 || 猶 安開法師

43 由 || 猶

44 疑 || 意 法師

45 由 ||

46 由 || 猶 法師

47 由 ||

48 劣十者 安開法師

49 所 || ナシ 安開法師

50 燃 ||

然 安開法師

51 聖 || ナシ 安開法師

52 言 || 有卷

53 開 || 圖 法師

(十四) 又問、經所說言志心念佛、必得往生西方淨土。以此妙門則應成佛、如何觀心、<sup>54</sup>

求於解脫。

答曰、夫念佛者、當修正念。了義爲正、不了義爲邪。正念必得往生、邪念云何

<sup>55</sup>

達彼。佛者覺也。所謂覺察身心、勿令起惡。念者憶也。所謂憶持戒行、不忘精

勤。了如是義、名爲正念。故知念在於心、不在言也。因筌求魚、得魚忘筌。因

56

言得意、得意忘言。既稱念佛之名、須行念佛之體。若念無實體、口誦空名、徒

自虛功、有何收益。且如誦之與念、名義懸殊。在口曰誦、在心曰念。故知念從

心起、名爲覺行之門。誦在口中、即是音聲之相。執相求福、終無是乎。故經

云、凡所有相、皆是虛妄。又云、若以色見我、以音聲求我、是人行邪道、不能

見如來。以此觀之、乃知事相非真正也。

(結) 故知過去諸聖所修功德、皆非外說、唯只論心。心是衆聖之源、心爲萬惡之主。

涅槃常樂、由自心生、三界輪迴、亦從心起。心爲出世之門戶、心是解脫之關津。知門戶者、豈慮難成。識關津者、何憂不達。竊見今時淺識、唯知立相爲

54 問十曰㊂

55 正、不了義爲 || ナシ

56 往生 || 西方

功。廣費財寶、多傷水陸、妄營像塔、虛役人功。積木壘泥、塗青畫綠、傾心盡力、損已迷他。<sup>57</sup> 未解慚愧、何曾覺悟。見有爲則勤勤愛著、說無相即兀兀如迷。

且貪世上之小樂、不覺當來之大苦。此之修學、徒自疲勞、背正歸邪、誑言獲福。但能攝心內照、覺觀常明、絕三毒心永使消亡、閉六賊門不令侵擾。自恒沙功德、種種莊嚴、無量法門、一一成就。超凡證聖、目擊非遙、悟在須臾、何煩皓首。眞門幽秘、寧可具陳、略說觀心、詳其小分。

達摩大師觀心論一卷<sup>58</sup>

57 己ニ己ニ開卷即禪

58 達摩大師觀心論一卷十終

開・ニナシ法開

# 朝鮮所伝諸本の序跋と刊記

## 鶴林府刊本

### 跋文

禪是佛心、教是佛語。凡修真出世者、不可偏廢也。心口相應、稱理而修、頓超佛地、莫若斯論也。是以予與信士兩三、同堅願幢、募工雕板、印施無窮者。

### 刊記

元統三年乙亥正月 日鶴林府開板

刻手僧 法玄甫英

別色 記官 崔卞

戶長金 珍

幹善 堀玄寺住持通玄普應大師 性宏

同願 鶴林府權知尹知蔚州副使盧 慎

慶尚道按簽使中顯大夫監察執義金 囂

次登廁規式

# 安心寺刊本

## 序文

後學 朴移成 撰

如來所傳、以心傳之、心之所傳、以傳觀心。如是之傳、始於靈山、西傳四七代至菩提達摩大師、東來此土始傳觀心、是爲初祖。直使惠可大師說此觀心之要、嗣傳祖位、是真觀心之傳也。雖歷代之傳至矣、盡矣。至於大師此土之傳有加焉矣。是以後之求佛道者、求此觀心之傳、則觀彼歷代之傳心、猶若眼前矣。或曰、心兮本虛、應物無迹、何以觀之。曰、如來謂塵墨之劫、觀彼久遠、猶若今日、儒家所謂前乎千百世之已往後乎。千萬世之未來皆在目前、彼皆以目觀之歟。所謂觀心者、非觀之以目、觀之以理也。以理觀之、則天下之心無所不觀。故大師能觀天下之心、能爲一心之鑑、能用諸佛之心、能傳統一之心。何其疑哉。又問、心之虛靈、知覺人之所得乎。天而各自有之、達摩本無此心、傳得於諸佛之心、爲心而悟之歟。後之求佛道者、亦無此心、傳得於達摩之心、爲心而悟之歟。是心有故是相有之、心相俱生孰無此心。心者非由外鑑我、我固有之、但能自覺何能外求。曰、若然而不求自覺、則均是佛、豈有諸佛衆生之名哉。據汝所說、則天必有私矣。師之大悟者、天私與之。

虛靈知覺之心、而悟之歟。六趣之所迷者、不與其心而迷之歟。竊聞天與之謂性、人得之謂心。天地之理、在人而爲性、天地之氣、在人而爲形。性者天理之公也、形者人之自私也。

心則兼得理氣、而爲一身之主宰也。是以師說染心淨心之二、如儒家人心道心之異。蓋心之虛靈、知覺一而已矣。有迷悟之異者、非天地之私與。由人之自私、而求與不求耳。求之於觀心之傳、則得其淨心而悟之。不求觀心之傳、則受其染心而迷之矣。譬如和氏、視得荊山寶玉而傳於後世、和氏之前本無其玉而不視歟、本無視玉之目而不視歟。天使和氏使私與之、視玉之目而視之歟。玉之潔淨光澤、目之圓明照耀、與天地俱生而各自有之。視與不視者、求與不求耳。後之欲求視玉者、傳得於和氏視玉之理、視玉則其玉可視矣。後之欲求心者、傳得於大師觀心之理、觀心則其心可觀矣。

## 刊記

願以所修功德

聖壽萬歲。海內清平。流及法界。普濟含靈。同歸

淨土。親見彌陀。

校正華嚴宗大選雪嘯

大施主金末祥兩主

別座道熙

天順癸未冬謹序

布施大施主安和進兩主

太雲

漆大施主成必柱兩主

智熙

成世珠兩主

化主印珠

性宗

慧澄

信俊

隆慶四載全羅道同福地無等山安心寺開板

## 開心寺刊本

### 刊記

萬曆八年三月上潮前箕子殿參奉崔德碩書

奉爲主上三殿壽萬歲  
玉禪供養主義峻

大施主敬修 祖安 處禪 洪海 宗修

靈隱 智行 思敬 性行 俗離

淳藏 惠默 惠亢 性一 苦椒

化主乾坤衲子天旭字原明  
木手李業真

# 奉恩寺刊本

## 刊記

咸豐十一年辛酉夏寶蓋山石臺重刊移鎮

于廣州奉恩寺

## 『法海寶筏』所收本

### 刊記

信士德雲居士法界心施資印此

法海寶筏恭爲

先考庚辰生密陽朴枝興

先妣甲午生潭陽田氏 仗此勝緣往生極

樂即證菩提之願。

光緒癸未七月 日甘露社識

『禪門撮要』所収本

刊記

刻板大施主

京西署餘慶坊篩洞居

參書官庚申生姜在喜

坤命丁巳生李氏己未生崔氏妻昌原黃氏

父辛丑生姜文煥

母戊戌生田氏

率子癸巳生壽哲庚子生順根癸卯生順釗

願以此功德生前壽福於無窮後往極樂之上品

隆熙元年七月日慶尚北道清道郡虎踞山雲門寺開刊

移鎮于南道萊府金井山梵魚寺板移戒明啓文